

1.1 楽章

ー誕生ー

1-1. 口語訳と解説

(1～35 小節)

The virgin will be with child and will give birth to a son, and they will call him Immanuel.

処女 (=マリア) は子を身ごもり、男の子を産むだろう、そしてその子はインマヌエルと呼ばれるだろう。(いわゆる処女懐胎、そしてキリストの誕生)

(36～62 小節)

When they had gone, an angel of the Lord appeared to Joseph in a dream.

"Get up," he said, "take the child and his mother and escape to Egypt. Stay there until I tell you, for Herod is going to search for the child to kill him."

彼ら (=博士¹) が去ったのち、夢の中で主の天使がヨセフ²に現れた。彼は「起きなさい。子供 (=キリスト) とその母親 (=マリア) を連れてエジプトに逃げなさい。そして私があなたに知らせるまでそこにいなさい、ヘロデ大王³が子供 (=キリスト) を殺すため探そうとしているからです。」と言った。

(63～96 小節)

When Herod realized that he had been outwitted by the Magi, he was furious, and he gave orders to kill all the boys in Bethlehem and its vicinity who were two years old and under.

ヘロデ大王が博士たちに騙された⁴と知ったとき、彼はひどく怒った。そしてベツレヘムとその周辺にいる2歳以下の男子全員を殺すよう命令した。(キリストを見分けられないため、その可能性がある幼子を全員殺してしまおうという残虐なやり方=幼児大虐殺)

¹ 東方三博士のこと。後にでてくる”Magi”と同一。祭司の役職に就き、天文学や占星術に携わっていた。ユダヤのベツレヘムに予言されていた星が現れた (=キリストの誕生) ことを見つけ、幼子であるキリストを拝みに行き、そこで乳香、黄金、没薬といった贈り物もささげている。

² イエス・キリストの父。

³ ユダヤ国王。極めて猜疑心が強く、身内を含む多くの人々を殺害した。救世主キリストの誕生を知り、恐れをなしてキリストを殺そうと企んでいる。

⁴ 博士たちはキリストを見つけたらヘロデ大王に知らせるよう言われていたが、夢でヘロデのもとへ帰るな、というお告げを受けてそのまま自分の国へ帰っていった。結果としてキリストはヘロデに殺されることなく生き延びることができた。

(97～122 小節)

"Get up, take the child and his mother and go to the land of Israel, for those who were trying to take the child's life are dead."

「起きなさい。子供と母親をイスラエルへ連れて行きなさい、子供を殺そうとしていた者たちは死んでしまいました」(幼児大虐殺後の話。この後に幼児大虐殺のシーンが描かれているので少し時系列が逆転している)

(123～128 小節)

And so all the male children of Bethlehem and its surroundings were slain except for one.

そしてベツレヘムとその周りにいた男の子たちは一人(=キリスト)を除いて虐殺されてしまった。(キリストはエジプトに逃げたので助かった)

—ここから 30 年経過—

(129～141 小節)

Then Jesus came from Galilee to the Jordan to be baptized by John.

But John tried to deter him, saying, "I need to be baptized by you, and do you come to me?"

それからイエスはヨハネ⁵から洗礼を受けるため、ガリラヤ地方からヨルダン川へとやって来た。しかしヨハネは彼を思いとどませようと言った、「私こそあなた(=イエス)から洗礼を受けなければならないのに、どうしてあなたが私のところにおいでになるのですか」と。

(142～148 小節)

As soon as Jesus was baptized, he went up out of the water. At that moment heaven was opened, and he saw the Spirit of God descending like a dove and lighting on him. And a voice from heaven said, "This is my son, whom I love; with him I am well pleased."

イエスは洗礼を受けるとすぐ、水(川)から上がった。その瞬間に、天が開かれ、神の御心がイエスを照らしながら鳩のように舞い降りてくるのを見た。そして天からの声が言うことには「これは私の愛する息子であり、私の心にかなうものである」と。

⁵ このヨハネは洗礼者ヨハネのことであり、イエス・キリストの父とは別人。

1-2. 曲の解釈

(1~35 小節)

冒頭のキーワードは「神秘的」。フルートのソロは軽く、美しく。小鳥のさえずりのようなイメージで。全体的に暖かく包み込む演奏をしたい。自分の中ではいつも森の中に、木々の隙間かやわらかい日が差してくる情景を浮かべている。

このセクションの転換点は26小節目アウフタクト~Bbdur から B moll への変化が1拍で行われるのでかなり大切にしたい。表面的な動きではなく、根底そのものから動きを促すような深い響きが欲しいところ。

The image shows a page of a musical score for measures 24 through 29. The score is for a full orchestra and includes parts for Piccolo, Flutes (1 & 2), Oboes (1 & 2), English Horn, Bassoon (1 & 2), E♭ Clarinet, B♭ Clarinet (1, 2, 3), E♭ Alto Clarinet, B♭ Bass Clarinet, E♭ Alto Saxophone (1 & 2), B♭ Tenor Saxophone, E♭ Bass Saxophone, Flute Horns (1, 3, 2, 4), Bass Flute Horn (1 & 2), B♭ Trumpets (1, 2, 3, 4), Trombones (1, 2, 3, 4), Euphonium (1 & 2), Bass, and Double Bass. A red box highlights the first measure of measure 26 across all parts, indicating the key change from Bbdur to B moll. The score includes dynamic markings such as *p*, *pp*, *mf*, and *cresc.*, and performance instructions like *Tutti*.

図 1 26小節目アウフタクトからの変化

その後は 36 小節目に向かって *accel.* を伴いながら緊迫感を増していくので、テンポを上げる際にはひとりでに加速しないよう全体で前へ進む意識を持っていきたい。メロディー、伴奏ともに深い響きを持たせることは継続し、かなりたっぷり息を使いたいところ。痛い音 NG。キリストにこれから訪れる受難を予感させるような、底知れぬ何かが迫ってくるイメージで。36 に入るギリギリまでこのニュアンスを保ち続けたい。

(36~62 小節)

前のセクションから少し緊張が緩和される（音は緩くしない）。幼きキリストの命を奪おうとするヘロデ大王から逃れるためエジプトに行くシーン。短調ベースのセクションだがそこまで暗く感じさせないのは、細かくリズムを打つ *Bongo* と常に *leggiero* のメロディーを担う *Cl(+Sax)* のおかげであり、これがあることで迫り来る危機（ヘロデ大王）への不安と、新しい地での安息を同時に表現できている。*Bongo* と *leggiero* のメロディーは短調だからといって重たく捉えず、素直に、軽快で優美に(=*leggiero*)ということをお願ひしたい。45~ *Tb*, *Euph*, *Bass* の四分音符テヌートは少し重みを伴いたい。具体的には硬い発音は避けつつ、暖かい息を最初から必要なスピードで送る（後なりにはしない）。49~ *marcato* は違いをはっきり見せたいのでかなり意識的に。息のスピード（=ブレスのスピード、深さ）が足りないと立ち遅れるので常に気をつけたい。*marcato* の中でも 50 小節目 7/8 の 2+2+3 の 3 の部分はかなりはつきり (*Tp* 特に注意)

(63~96 小節)

59~ではあるが、図の動きがしばらく続くのでこの部分は裏拍をしっかりと感じてシンコペーションのように捉えてほしい。しかし、各音がはねすぎるとしつこいので、音価は十分に保って音の変わり目には遅れず捉える意識を持っていきたい。

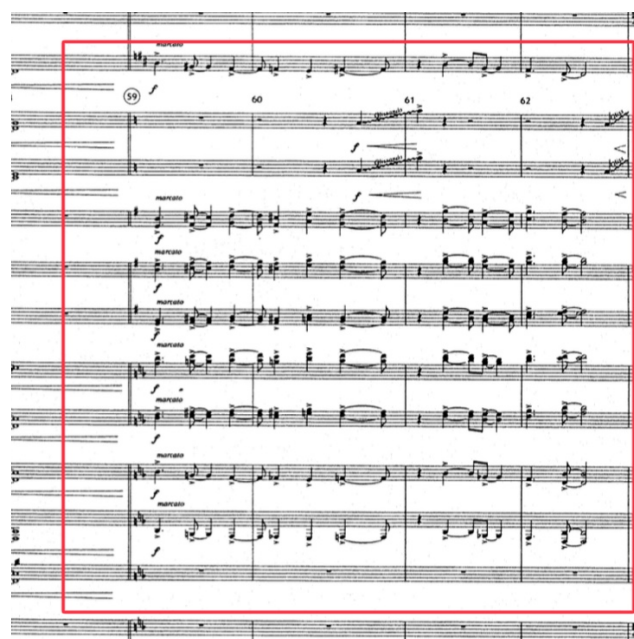
The image shows a musical score for measures 59 to 62. A red rectangular box highlights the bass line across all staves, showing a consistent rhythmic pattern of eighth notes. The score includes various instruments such as saxophone, trumpet, trombone, euphonium, and bass. The key signature is one flat, and the time signature is 4/4. The highlighted pattern is a steady eighth-note pulse, which is noted in the text as being similar to the pattern in the following section.

図 2 59 小節目~の動き（以降の同じ動きも注意）

77~の **Meno Pesante** は優しさ、遠慮はいらないのでかなり強烈に。音の立ち上がりや鋭さを意識して。幼児大虐殺が命じられるかなり残虐な場面。人々の苦しみや叫びのようなものが **Meno Pesante** 付近に内包されているのではないかと。

(97~122 小節)

misterioso の表現がこのセクションの鍵。そもそも **misterioso** は「神秘的に」「不思議な」の意だが、かなり抽象的な言い回しなので、この場面でのイメージを統一しておきたい。97~はキリストの命を狙っていた者たちが死んだので、イスラエルに戻るというシーン。本来は命の危険はないはずなのでもっと落ち着いた音楽でも良いのではないかと思いつくが、そうはいつてもどこかまだ何か起こってしまうのではないかという不安、それから戻ってみればベツレヘム付近では2歳以下の男子がキリストを除いて全員殺されてしまっているという異常な状態、これらが相まって **misterioso** という結果になっているのだろう。この **misterioso** では楽器に吹き込む息のコントロールに気を遣って欲しい。特に発音が強すぎたり明後日の方向に飛んでいく音は似つかわしくない。少し狙いを定めて繊細に音を捉える。フレーズの変わり目やスラーのつなぎ目の最初の音では、気が抜けてぶっきらぼうな音、あるいは痛い音になってしまいやすいので要注意。

(123~128 小節)

時系列逆転だがここで幼児大虐殺の後の場面。しかし音楽はそこまで悲壮感がない。個人的には「幼児が殺されてしまった」という側面よりも「キリストが生き残り、これからの世界に希望が残った」という側面をよりうつし出しているのではないかと思う。123~のテヌートの旋律(+同じ動き)を中心に一音一音にエネルギーを感じながら内なるパワーをみなぎらせて行きたい。力がどんどんと溜まって行って緊張していく。129で緊張の緩和、解放。

(129~141 小節)

時は飛んでおよそ30年後、イエスが洗礼を受けようとする場面。曲の流れとしては激しいセクションを過ぎて落ち着いたところ。雰囲気としては神聖な感じがしている。旋律の四分+四分+二分のリズムパターンは129~からそのまま受け継いでいるものの、こちらではスラーを中心にかなり流れを大切にしながら吹きたいところ。そのため一音一音力を入れ過ぎて重苦しくしたくない。ここ以降でもそうだが、スラーが切れているから必ず切れというわけではなくフレーズの流れとしてどのように繋ぐのが一番良いかを考えてみてほしい。137~の **Tb, Hr, Euph** は聴かせどころ。各パート間の接続によく注意して綺麗に響かせたい。

(142~148 小節)

1楽章のコーダ部分。決して焦ることなく1歩1歩着実に進む意識で。この場面での四分音符のアクセントの扱いが難しく、むやみに強く発音するだけというのは避けたい。イメージとしてはアクセントテヌートの方が良いかもしれない。その音自身の音価を捉えて着実に音の核を拾っていきたい。ラストは綺麗な **Bb** のハーモニーで締める。無理に力まずリラックスして決めたい。

2.2 楽章

-3つの誘惑-

2-1. 口語訳と解説

(1~4 小節)

Then Jesus was led by the Spirit into the desert to be tempted by the devil.

イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。

(5 小節)

After fasting forty days and forty nights, he was hungry.

四十日四十夜、断食をした後、イエスは空腹となった。

(6~11 小節)

The tempter came to him said, "If you are the Son of God, tell these stones to become bread."

試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」。

(12~62 小節)

Jesus answered, "It is written : Man does not live on bread alone, but on every word that comes from the mouth of God."

イエスは答えて言った、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書かれている⁶」と。

(63~140 小節)

Then the devil took him to the holy city and had him stand on the highest point of the temple. "If you are the Son of God," he said, "throw yourself down. 'For it is written: He will command his angels concerning you, and they will lift you up in their hands, so that you will not strike your foot against a stone.'" Jesus answered him, "It is also written: Do not put the Lord your God to the test."

それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、寺院の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんください。

『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから⁷」。

⁶ 聖書からの引用文を用いている。これが3つの誘惑のうちの1つ目。イエスは神の子である証明に自分の力を自分のために使うようなことはしない、と誘惑をはねのけた。

⁷ 神の子であるならば飛び降りても天使たちに支えられるだろう、という2つ目の誘惑。神を信じるものは救われる、とはいえこれも聖書の内容を他人を利用したり自分のために使ったりはしない、としてこれも断った。

イエスは答えて彼に言った、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」と。

(141～157 小節)

Again, the devil took him to a very high mountain and showed him all the kingdoms of the world and their splendor. "All this I will give you," he said, "if you will bow down and worship me."

次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」⁸。

(158～215小節)

Jesus said to him, "Away from me, Satan! For it is written: Worship the Lord your God, and serve him only."

するとイエスは彼に言った、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」と。

(216～220小節)

Then the devil left him, and angels came and attended him.

そこで、悪魔はイエスから離れ去り、そして御使たちがやってきて彼に仕えた。

(221～236小節)

From that time on Jesus began to preach, "Repent, for the kingdom of heaven is near."

この時からイエスは教えを宣べはじめて言われた、「悔い改めよ、神の国はすぐそこにある」と。

2-2. 曲の解釈

(1～4 小節)

Senza Measure(Senza Misura)=拍子なしで。各楽器がそれぞれの動きを繰り返し、混沌と入り乱れる。悪魔に試されるため、荒野に来ている場面だが、そこで風の吹きすさぶ様子や不穏なざわめきを表現しているかのよう。カオスな感じではあるがスタッカートの打ち込みとスラーの動きの対比はしっかり見せたい。また、合図3で入るE.H. soloをかき消さないように全員で注意したい。2小節目の連符は鋭く吹き込み、3拍目頭を決めきってから余韻を残さない。

(5 小節)

Tpのmute部分は最後の音を吐き捨てないように、かつ三度のハモリを感じられると良い。

⁸ 3 つ目にして最大の誘惑。今後キリストに訪れる受難などを経ることなく、直ちにこの世界を手に入れられるという誘い。

(6~11 小節)

Euph, Tu, St.B.の表の四分打ちとHrの裏拍からの四分打ちが均等な間隔で聞こえたい。慎重に歩を進めていくイメージで。各ソロの第一音にあるテヌートは多少拍を無視して強調してもよい。

(12~62 小節)

12に入った途端空気が変わって *solemne*=荘厳に。特徴的なのは3/4拍子なのに2拍単位で進んでいくこと。普段弱拍になるはずの2,3拍目でもこの場面は躊躇なく踏み込んでほしい。17~*Allegro vivace* 前は予備拍2つ取っているが、ここでもう少し全員のテンポ感をそろえて入りたい。21~の連符はかなり迫ってくる感じを演出したい(22~の *cresc.*を効果的に)。40~メロディーの動きは2/4拍子での四分音符に注意で、それまでのフレーズの延長線上にあるように自然に吹きたい(四分音符で最後の一押し、などはしない)。60の *Senza Measure* の頭の音、特に Fl, Picc がきつい音色になりやすいのでより丁寧にきれいに響くよう吹き方を研究されたい。

(63~140 小節)

63~テンポが落ち着くので重くなっていきやすいが、ここでも緊張感は保って進みたい。2つ目の誘惑でキリスト自身の身を投じて見せるように言われるが断っている。決して誘いに乗ることはないので奏者も気の緩まぬ演奏で付け入る隙を与えないようにしたい。103~低音群のメロディーが始まる。縦を合わせることは大切であるが、縦ノリが強すぎて1拍ごとの音楽に奈良のように注意したい。激しい音楽の中にもフレーズ感を感じて演奏できると良い。

(141~157 小節)

曲調が似ているが、~140と141~では場面が違うことに注意。キリストは世界を見渡せる高い山の上へと連れられ、その世界すべてを自分のものにできるという最大の誘惑を受ける。ここでは下界に広がる街などイエス(と悪魔)から見た見下ろした世界の情景描写の場面だと考えられる。もしかしたら *solo* は悪魔の誘惑の声なのかもしれない。

(158~215 小節)

悪魔に対して強く拒絶する場面。158の入りから一気に空気感をもっていきたい。164, 166などの木管の16分音符は最初から鋭く食いついて吹き込めると良い。170, 172ではFl, Hr, Tpが積極的に入りを捉えたい。175の3拍目~木管高音の16分はかなり強烈にお願いしたい。きっぱりと”No”と言い切るイメージで。

(216~220 小節)

小節を経るごとにカオスな和音から徐々にきれいな響きへと変化していく。非和音が少しずつ無くなっていく形でまさにキリストを取り巻いていた悪魔、あるいは穢れのようなものが無くなり、浄化されていくような印象。一番最後に残る220の響きを大切にしたい。

(221～236小節)

明るいC durとなり、悪魔が去って”kingdom of heaven”に近づいた様子が曲調の変化から見て取れる。cantabile, espressivo, dolce などそれぞれ特に重要視して扱いたい。

3.3 楽章

—聖堂への到着、最後の晩餐、捕縛、磔刑、復活—

3-1. 口語訳と解説

—キリストは悪魔の誘惑後すぐに宣教を開始し、信者を増やしたところで聖地イスラエルに宣教しに帰って来た—

(1～33小節)

A very large crowd spread their cloaks on the road, while others cut branches from the trees and spread them on the road. The crowds that went ahead of him and those that followed shouted, "Hosanna to the Son of David Blessed is he who comes in the name of the lord! Hosanna in the highest!"

群衆のうち多くの者は自分たちの上着を道に敷き、またほかの者たちは木の枝を切ってきて道に敷いた。そして群衆は前に行く者もあとに従う者も、共に叫びつづけた。

「ダビデの子に、ホサナ⁹。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」。

(34～97小節)

Jesus entered the temple area and drove out all who were buying and selling there. He overturned the tables of the money changers and the benches of those selling doves. "It is written," he said to them, "My house will be called a house of prayer, but you are making it a den of robbers."

それから、イエスは聖堂にはいられた。そして、庭で売り買いしていた人々をみな追い出し、また両替人の台や、鳩を売る者の腰掛を覆された¹⁰。そして彼らに言われた、「『わたしの家は、祈りの家となるべきである』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている」。—

(98～108小節)

"As you know, the Passover is two days away - and the Son of Man will be handed over to be crucified."

「あなたたちが知っているとおおり、2日後には過越の祭¹¹になるが、人の子(=キリスト)は十字架にはりつけられるために引き渡される」。

⁹ 「ホサナ」 = 「どうか、救ってください」(ヘブライ語)。キリストの帰還を祝福し、歓迎している。

¹⁰ イスラエルの神殿に到着したイエスは神聖な場所で売買が行われていることに怒り、両替人や動物商人を追い出して、売り場を破壊するなどし、神殿を清めた。

¹¹ ユダヤ教の祭日

(109～122小節)

When evening came, Jesus was reclining at the table with the Twelve.

夕方になって、イエスは十二弟子と一緒に食事の席についた。

(123～146小節)

Then Jesus went with his disciples to a place called Gethsemane, and he said to them, "Sit here while I go over there and pray."

それから、イエスは彼らと一緒に、ゲツセマネ¹²という所へ行った。そして弟子たちに言った、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここにすわっていなさい」と。

(147～206小節)

"Rise, let us go! Here comes my betrayer!"

「立て、さあ行こう。見よ、わたしを裏切る者¹³が近づいてきた」。

(207～212小節)

The high priest said to him, "I charge you under oath by the living God: Tell us if you are the Christ, the Son of God."

大祭司は言った、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ¹⁴」。

(213～216小節)

But the chief priests and the elders persuaded the crowd to ask for Barabbas and to have Jesus executed.

"Which of the two do you want me to release to you?" asked the governor. "Barabbas," they answered.

祭司長や長老たちは、バラバを赦して、イエスを殺してもらうようにと、群衆を説き伏せた。総督は彼らにむかって言った、「ふたりのうち、どちらをゆるしてほしいのか」。彼らは「バラバの方を」と言った¹⁵。

(217～219小節)

"What shall I do, then, with Jesus who is called Christ?" Pilate asked. They all answered, "Crucify him!"

ピラトは言った、「それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか」。彼らはいっせいに「十字架につけよ」と言った。

¹² イエスがいつも祈っていたオリーブ山の麓にある園。

¹³ ユダのこと。銀貨 30 枚でイエスの居場所を教えた。後にイエスを売った罪悪感から自殺する。

¹⁴ いよいよ裁判の場面。裏切られ殺される、というのにキリストは受け入れて黙秘している。

¹⁵ イエスか、バラバという罪人か、どちらを放免するか民衆が選択する場面。赦されたのはバラバのほうだった。

(220～228小節)

Then he released Barabbas to them. But he had Jesus flogged, and handed him over to be crucified.

そこで、ピラトはバラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。

(229～284小節)

... and then twisted together a crown of thorns and set it on his head. They put a staff in his right hand and knelt in front of him and mocked him. "Hail, king of the Jews!" After they had mocked him, they took off the robe and put his own clothes on him. Then they led him away to crucify him. ... and they forced him to carry the cross. They came to a place called Golgotha (which means The Place of the Skull).

また、いばらで冠を編んでその頭にかぶらせ、右の手には葦の棒を持たせ、それからその前にひざまずき、嘲弄して、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。また、イエスにつばきをかけ、葦の棒を取りあげてその頭をたたいた。こうしてイエスを嘲弄したあげく、外套をはぎ取って元の上着を着せ、それから十字架につけるために引き出した。そして、ゴルゴタ、すなわち、されこうべの場、という所に来た。

(285～297小節)

There they offered Jesus wine to drink, mixed with gall; but after tasting it, he refused to drink it. And when Jesus had cried out again in a loud voice, he gave up his spirit. At that moment the curtain of the temple was torn in two from top to bottom. The earth shook and the rocks split.

彼らにはがみをまぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはそれをなめただけで、飲もうとしなかった。イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとった。その瞬間、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。地震が起こり、岩が裂けた。

(298～312小節)

The angel said to the women, "Do not be afraid, for I know that you are looking for Jesus, who was crucified. He is not here; he has risen, just as he said."

この御使は女たちにむかって言った、「恐れることはない。あなたがたが十字架に磔になったイエスを捜していることは、わたしにはわかっているが、もうここ（墓）にはいない。彼が言ったとおりに、よみがえったのである。

(313～333小節)

Then Jesus came to them and said, "All authority in heaven and on earth has been given to me. Therefore go and make disciples of all nations, baptizing them in the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit, and teaching them to obey everything I have commanded you. And surely I am with you always, to the very end of the age."

イエスは彼らに近づいてきて言った、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と

聖霊との名のもとに、彼らにバプテスマ（洗礼）を施し、命じておいたいっさいのを守るように教えよ。わたしは世の終わりまで、確かにいつもあなたたちと共にいるのである」。

3-2. 曲の解釈

(1~33小節)

この場面はleggiero中心のリズム感が非常に大切。打ち込みは一定のテンポ感をキープしながら各音を丁寧にピックアップするイメージが良い。全体として7/8や6/8+2/4などのリズムパターンをもっと把握して、行き当たりばったりでなく先を読んで演奏する余裕ができる方が良い。特に管と打楽器の噛み合いが重要。

(34~97小節)

~34のaccel.直後はHrがしっかりと音を張ってテンポを牽引する。Hr+木管連符とTuは2+2+3で噛み合うはずなのでお互いその意識を強く持って揃えたい。50~Picc, Fl, Obの打ち込みが曲調に対して優しくなることが多いのでstacc.をしっかりと見せながら鋭く吹き切る。神聖な場所で欲に溢れた売買などをしてきたことに対してイエスが咎め、清めるシーン。決して甘えず、厳しく怒る（Hr,T.saxなどのfurosoがまさにそう）という風景が見て取れる。全体的に動きが激しく、強い打ち込みが74~などでも多く見られる。1音1音が軽くならずに、息を入れ切って鋭さを出すものの、アクセントで余韻を残しすぎて垂れる音楽にならないように気を遣う。休符感（ブレスの取り方など）が非常に重要。85~3連符と16分が共存しながら91へと向かっていく。ここはそれぞれ自分の動きを信じて91まで吹き切る覚悟でお願いしたい。91の入りはmarcatoとわかるようにかなり明確に、立ち遅れずに。

(98~108小節)

イエスは自身が磔になるという運命を知りつつも決して避けずに受け入れる。その重たい結末を暗示するような不穏な雰囲気と、どうしようもない悲壮感が感じられる曲調。伴奏もメロデーも一つ一つの音がかなり重要で、避けられない運命が向こうから一步また一步とゆっくり、着実に近づいてのしかかってくるイメージを持ちたい。

(109~122小節)

最後の晩餐にて。イエスを含む13人の中にはイエスを売った裏切者もいる中での晩餐であり、イエスが引き渡され磔にされることに対する深い悲しみが感じ取れる。しかし曲調は一定して落ち着いており、裏切られたことも含めイエスはすべてを悟り、受け入れているような様子とも読み取れる。伴奏もソロも、元気いっぱいという場面ではないことに気を遣って慎重に吹きたい。

(123~146小節)

ゲツセマネへ祈りに行く場面。Des-durからC-durへと穏やかながら荘厳で慈愛に満ち溢れたよう

な調性から、開けた明るい調性へと変化していく。イエスは避けられない運命のその先に何か明るい未来を見出していたのかもしれない。全員で和音の響きや変化、調の変化を敏感にキャッチして繊細に演奏したい。

(147～206小節)

149～これまで何度も出てきたフレーズの形。Hrはこの場面ではスラーのつながりを生かしてすべての音にしっかり息を入れながら音価も大切にしたい。159木管高音は突然に鋭く切り込んできてほしい。mfとはいえスピード感はかなり持って入りたい。169,176

も同様。168,175のHr、*marcato*をこれでもかというほど聞かせたい。これに呼応して木管高音につながる。189～1楽章にも出てきていた動きと同様、拍感をしっかり持ってシンクペーションのようにしっかり捉えたい。

(207～212小節)

裁判の場面に移る。神の子であるかどうか答えなさいと質問を受けているところ。テンポも一気に落ち、長い音符中心の音楽となり、イエスにのしかかる運命そのもの、のようなものが感じ取れる。長い伸ばしも、刻んで動くClも裁判ということを念頭に置いてかなり神妙で重たい場面であることを理解して吹いていただけると良いかと思う。

(213～216小節)

(217～219小節)

(220～228小節)

イエスと、もう一人罪人がいる状況で、どちらかは放免されるというシーンにて。民衆たちが選んだのはバラバという罪人のほうだった（イエスが殺されることを選んだ）。片方は殺されることになり、片方は赦されるという、極限の緊張状態から生み出されるカオスな場面が曲調に現れている。祭司長と民衆のやりとりがB.Saxのsoloとその直後の混沌とした場所なのかもしれない。

(229～284小節)

非常にはっきりとしたビートで3/4拍子を刻む。FlやClのアクセント+スタッカートは力が抜けていけないよう、かなりスピード感を持って吹き込む。四分音符で打ち続けるパートは、テンポどおりも大切だが、常に推進力をもった音にしたい。Tb, Tpの随所に出てくる打ち込みも鋭く。258からはほとんどの木管楽器+Tpなどがユニゾンで打ち込む。ここの精度、鋭さともにさらにこだわって吹きたい。欲を言うと257のppからのcresc.をさらに効果的に表現したい。270～音がぶつかりながら打ち込む場面では少し音の立ち上がりやキレが鈍りやすいので要注意。279～磔のシーン（釘を打ち込む音）

(285～297小節)

Pianoのクラッシュトーン+perc.でかなり激しい演出。イエスが命を落とす場面。イエスが亡くなり、地震が起こって地面が裂ける。297の最後に向かってエネルギーが増大していった最後は大

地がぐらぐらと揺れ動いているような、地鳴りのようなイメージ。297の最後の最後まで追い込んで吹き切って欲しい。

(298～312小節)

キリストを探す人々に対し天使がキリストの復活を告げる。メロディーの形は109と同じだが途中から重なる伴奏の厚みに変化がある。Clがsoloと同じリズムで動き、Saxも伴奏に加わる。どんな風にも解釈ができるが、復活を遂げたキリストと、それに仕える御使たちがともにあらわれているようなイメージが持てる。312で包み込むようなあたたかさを伴いながら313のコーダを迎える。なるべく313に入るギリギリまで持続させていきたい。

(313～333小節)

この曲で一番たっぷり歌い上げたいところ。まさに*sempre cantabile*。復活を遂げ、天地を司る力を持って再び現れたイエス・キリストに対する、歓喜の感情。そしてそれを取り巻く壮大なスケール感が一気に溢れ出る場面になっている。背負った運命を乗り越え、解き放たれた解放感も伴う非常に荘厳で輝かしいラストシーン。一音一音をたっぷりと、しっかりと吹き切って歌いたい。特に323では決め所であるにも関わらず綺麗な和音でハマらない（だがそれが良い）ここは何か声にならない感情や喜び、慈愛などが一気に爆発している場面とも考えられる。和音としてはその後324や326で解決する。326~はまさに堂々と、闊歩していくようなイメージで、これからのイエスの存在する世界に対する大きな希望が見える終結になっている。最後の最後まで気を抜かずに精一杯吹き切りたい。